

培土の適期についてはこの試験結果から、植付期から萌芽期までの間およそ1ヶ月弱の期間となる。

試験を終えて、培土について考え直してみた。

培土の目的と効果については、乾燥防止、排水、地温上昇、除草、新しいものの緑化防止、暑害防止、疫病等病害回避、等々いずれも納得できよう。しかしその適時期については、萌芽前本培土前に実施する、こすり・めくらがけ・早期培土と称する中耕の変形とみられる40年ほど前の技術、近年では気象と土壌条件の不適合から重粘地における植付け時培土がある程度であり、現在の着蕾期を適期とする試験の根拠は見当たらない。見方を変えれば古くから、適期については疑問の余地がなかったといえよう。その概要は半培土を含めて2

回ほど着蕾期に実施、遅くなると根部の損傷が大きくなるので、開花始前までに本培土を終了することが強調されている。米国では萌芽時に数回に分けて徐々に本培土を完了する技術がある。自分の経験からみても萌芽時の横方向への根の進展は早く、まして着蕾期の培土時においては培土機に多量の根を引きずるのをみる。このようなことから、培土時の作物の損傷には細心の注意が必要であるし、極早期培土が有利な点である。

なお、極早期培土を通常の植付け時期にまで拡大して推奨するつもりはないが、従来の短かった培土適期間を長期間としたことは大きな意味があろう。栽培農家の方々には排水のよい黒あざ被害の少ない圃場を選んで早期植付け極早期培土を是非試していただきたい。

古典にみるイモの話 (その2)

東北大学農学部教授 一 島 英 治

4. ヤマノイモ

ヤマノイモは日本に野生していました。和名抄では、世末乃伊毛、長伊毛、あるいは夜万都伊毛とあり、俗には山乃伊毛といい、薯蕷とも書きました。ヤマノイモは单子葉植物で世界には9属22種あるといわれています。

奈良・平安時代の貴人の食べ物として、宮中で宴の果てた後などに供した「芋粥」がありました。芋粥は薄く切ったヤマノイモをアマカズラ（甘葛、あまづら）の汁で煮た粥でした。

15世紀の『言国卿記』¹⁰⁾（文明6年（1474）

～文亀元年（1501））には、

寒きにとて、風防ぎに芋酒これ有り
とあり、芋酒、薯蕷酒といって、ヤマノイモをすりまぜた薬酒がありました。精力増強薬としても使われたようです。室時代からヤマノイモはカマボコ、ハンペンの材料となったようです。

ヤマノイモには面白い言葉があります。

山の芋（薯蕷）が鰻になる——物事が意外な事に変化向上するたとえ——

十返舎一九の『東海道中膝栗毛』¹³⁾の発端のところに、

やまのいもうなぎ 薯蕷鱧にならず、相替らぬ貧乏、……
と使われています。もう一つ面白いたとえば
次に示します。

山の芋で足を突く——意外なことで失敗
するたとえ——

ヌカゴ（零余子、零餘子）は和名抄では沼
加古で、ムカゴ（無加古）ともいいます。ヤ
マノイモのつるの葉のつけ根に生ずる長円形
の腋芽で、指頭大の芋の様な形をしたもので
す。食用になります。ヌカゴは成熟すると、
自然に落下して根を生じ若芽を出して、母植
物と同じ植物に成長します。無性的ですが、
種子と同じ役割をします。ヌカゴを畑にまい
て育て、秋に小さなヤマイモを収穫し、翌年
の春に小さなヤマイモを畑に移し植えて大き
く成長させ収穫します。二年かがりの収穫と
なります。

佐瀬与次右衛門の『会津歌農書』¹²⁾にはヤ
マノイモのつるの巻き方が歌われています。

手をのべてをのれ（己）と右へまくつるハ
園のさゝげや山のいもなり

鴨長明（久寿2年（1155）～建保4年（12
16））は有名な『方丈記』¹⁴⁾をあらわしてい
ます。

ゆく河の流れは絶えずして、しかもも
との水にあらず。よどみに浮ぶうたかた
は、かつ消えかつ結びて、久しくとどま
りたるためしなし。世中にある人と栖と、
又かくのごとし。……

長明は、その中で、

…或は芋花をぬき、岩裂をとり、零余子
をもり、芹をつむ。或はすそわの田舎に
いたりして、落穂を拾ひて穂組を作る。

……

と、方丈にある六十の^{よはひ}齡の老と、ふもとの柴
の庵の山守の^{やまもり}ところの^{こわらわ}小童との遊行の際の食
用となる植物採取のさまを記しています。そ
こに、ヌカゴ（ムカゴ）が含まれています。

江戸時代後期の俳人、小林一茶¹⁵⁾（1763
—1827）は次の句をよんでいます。

ほろほろとむか^おご^{あきのあめ}落ちけり秋雨
汁鍋^{しるなべ}にゆさぶ^{おと}り落すぬか子^こ哉

ヌカゴは竹に刺し連ねて焼いたり、飯に炊
き込んだり、汁の実にしたりしました。とこ
ろが、室町時代後期の料理書『山内料理書』
（明応6年（1497））¹⁶⁾によると、

ぬかご指、雁を五分ばかりに四角に切
り、厚さ二分金に切り、摺^{すり}摺^ひしほ^{あぶ}り付^け焙^る。
串に鳥数三つばかり角^{かど}違^{ちが}いに刺^すべし。
凡そかくの如く串にきけて在るべし。
亀足^{きそく}の振り目と鳥の間、三ふせばかりた
る可し。……

零余子^{むかご}焼は今日の焼き鳥の祖型でしょうか。

ナガイモの一種である大和芋について、
『会津歌農書』は次の歌を残しています。

大和芋^{やまといも}植時 附行

大和芋つくね芋をも三月の

末つ頃より常に植べし

やまといも植る畑をバヤハラかに

なるほと深くうなひたかよし

大和芋種子覆する土くら（位）あ

家いもよりハ厚く掛へし

いもたねの大きな程そたちよし

あまりちいさくくた（碎）き植るな
零余子^{むかご}をハ芋の間へ植ま（増）せよ

三とせ過てぞたねに成ける

5. トコロ

トコロ（^{ところ}野老、^{ところ}薺）はヤマノイモ科の蔓草

で山野に自生し、冬に採食します。和名抄には、俗に茛の字を用いるとあります。江戸時代には家圃に栽培しました。冬春、根を採って、よく煮て鬚^{ひげ}を抜き皮を去って果として食べます。味は苦くて甘いものです。山中に自生するものは節多く、肉が痩せていて味は大変に苦いものです。

佐瀬与次右衛門の『会津歌農書』には、トコロの蔓は左巻きであることが歌われています。

こはいかに左へまくや忍冬（すいかずら）

藤^{フヂ}やところもおなじころに

トコロの蔓はトコロヅラ（冬^と菰^{ころづら}、野老^と葛^{ころづら}）といひます。ところづらは『万葉集』⁶⁾の中に歌われています。

皇祖^{すめらみ}の神の宮人とところづら

いや常^{とこ}しくに吾かへり見む

（7巻—1133）

万葉がなでは、「冬^と菰^{ころづら}」と表現されています。トコロは冬に採食するところから「冬菰」の字があてられています。

ところづらには万葉集⁶⁾の巻9—1809に悲しい物語があります。

菟原^{うなひをとめ}處女は二人の若者、血沼^{ちぬをとこ}壯士と菟原^{うなひをとこ}壯士に熱烈な恋をされ、遂に自らの命をたちました。血沼^{ちぬをとこ}壯士と菟原^{うなひをとこ}壯士は相次いで自らの命を断ちました。親族は「永き世に標せむと」處女墓^{おとめづか}をつくりました。

……妹が去ぬれば 血沼^{ちぬをとこ}壯士 その夜夢

に見 取り續き 追ひ行けば 後れたる

菟原^{うなひをとこ}壯士い 天迎^{あめ}ぎ 叫^{さけ}びおらび 地

に伏し 牙^き嚙^かみたけびて もころ男に

負けてはあらじと かき佩^{はき}の 小劔^{をだち}を取

り佩^はき ところづら 尋め行きければ

親族^{やから}ども い行き集^あひ 永き代に 標^{しるし}に

世むと 遠き代に 語り継がむと 處女墓^{をとめづか}

中に造り置き 壯士墓^{をとこづか} こなたかなた

に 造りおける ……

ここでは、ヤマモ科のトコロヅラは蔓をたぐって根を求めるということで、「尋め行きければ」にかかっています。

古事記にあるトコロヅラの記載は、倭建命の薨去^{ききさたち}の際に、后等また御子等が御陵を作り、水に漬っているナヅミ（泥）田であるなづき（煩）田にはひ廻^きって、哭き歌いました。

なづき田の 稻^{いな}幹^{ながら}に 稻^{いな}幹^{ながら}に 匍^はひ廻^{もとほ}ろ

ふ 野老^{とこづら}葛^ふ （古事記35）

倭建命の魂は八尋白智鳥に化りて、天に翔けて濱に向いて飛び行でました。とあります。

（次回・最終）

参考文献

- 13) 十返舎一九、麻生磯次校注『東海道中膝栗毛』（上）岩波文庫、22刷（1991）
- 14) 古市貞次校注『方丈記』岩波文庫（1989）
- 15) 丸山一彦校注『一茶俳句集』岩波文庫（1990）
- 16) 河上行蔵『つれづれ日本食物史、第二巻』東京美術（1992）

編集 後記

謹んで阪神大震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈りし、罹災された皆様方にお見舞申し上げます。テレビ・新聞などの報道を見聞き胸のふさがる思いですが、各方面からの善意の救援物資が配られ、そのなかで温かい焼いものをしっかりと握りしめ“これがいちばんです、有難いことです”と顔をほころばせておられたのが印象的でした。何はさておき、復興の一日も早からんことを切に祈念いたします。

いも類振興情報 第43号

平成7年4月15日発行

発行所 財団法人 いも類振興会
東京都港区赤坂6-10-41
ヴィップ赤坂303号室
電話 03-3588-1040
FAX 03-3588-1040
振替 00130-1-110152
印刷所 交通印刷株式会社